様式第3号

自己評価報告書（最終報告）

コース等名	芸術系コース（音楽）	記載責任者	山根　秀憲

■平成24年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ．学長の定める重点目標

Ⅰ－1．教員養成の質保証

大学の機能別分化・機能強化が求められる中，本学は教員養成大学として高度専門職業人としての教員を養成することを目標としている。教員養成の質保証のため，専攻・コースではどのような取り組みを行うか，具体的な方策を示してほしい。

1．目標・計画

教員養成の質保証については，知識や技能だけでなく，児童・生徒や他の教職員，保護者等の様々な人々とのコミュニケーション能力が不可欠である。そこで，本コースでは，授業を通して音楽科の教員にとって不可欠な専門知識や技能を身につけさせ，さらにコース全体の行事等の実践を通してコミュニケーション能力を培う。
(1)音楽を指導する教員にとって不可欠な実技能力を学生に身につけさせるため，一対一の個人指導を行い，各学生の状況やレベルに応じたきめ細かい指導を行なう。
(2)音楽授業を構想し，実践し，省察する能力を鍛えるために，専門的な理論を身につけさせると同時に，具体的な授業場面を想定した教材研究や学習指導案の構想，模擬授業の演習を通して，専門的な指導力の育成を促す。
(3)本コースでは，年に2回行われる学内演奏会及び卒業修了演奏試験のプログラム作成や演奏会当日のステージ・マネージメント等の活動を通して，学年の枠を越えた幅広い学生間のコミュニケーション能力を育成する。

2．点検・評価

(1)声楽関連の授業において，学校教育における音楽科の授業に援用可能な学習内容と指導方法を含め，個々の学生の能力や学習の状況および理解度に注視しながら指導を行った。グループによる実技指導の場合には，自分以外の学生が受けているレッスンを観察し，どのように教員が指導しているかを考え，そこから学びを得るように指導した。音楽理論・作曲関連の授業において，個々の学生の学習状況をみながら，音楽作品を理論と感性の両面で捉えることのできるよう，また表現の自由や創造性が十分に保証されるよう，授業を行った。ピアノ関連の授業において，個々の学生に応じた課題により，一対一の個別指導を行なうことで，ピアノの演奏能力，表現能力の向上を図った。管楽器関連の授業において，個々の学生の状況に応じた教材選択を行い，学習状況をみながら授業を行った。指揮関連の授業において，弾き歌いや振り歌いの個人指導を通して，実技能力の育成をはかった。
(2)コア科目の授業において，教材研究と授業構想の課題をグループで取り組ませ，TTの模擬授業の実習と省察のための討議を促し，音楽教師に求められる能力の確認と，その獲得状況を確認させた。また，具体的な授業場面を想定した教材研究や模擬授業の演習を通して，専門的な指導力を育成した。声楽関連の授業において，音楽授業を構想し，実践するための歌唱表現活動への理解と実践力を高めるように丁寧に指導した。合奏の授業において，器楽合奏の指導場面を想定し，受講生各自にアンサンブル指導の模擬授業を実践させた。
(3)年2回の学内演奏会や卒業修了演奏試験に向けた事前の準備（係打ち合わせ会，役割ごとの活動）や演奏会当日の活動への取り組みに関して，演奏会・試験後に反省会を開き，学生たちの発表態度や内容，ステージ・マネージメント等について省察させた。こうした活動は，学年の枠を越えた幅広い学生間のコミュニケーション能力を育成する良い機会となっている。

Ⅱ．分野別

Ⅱ－1．教育・学生生活支援

1．目標・計画

教育支援については，平成17年度から実施している教員養成コア・カリキュラムをさらに充実させ，平成25年度から始まる教職実践演習にスムーズに連結できるように，教育指導体制を確立させていく。そのために以下の内容を検討し，改善を図る。
(1)第1コア授業「初等中等教育実践基礎演習」において，学生が大学生活にできるだけ早く適応し，意欲的に授業に参加し，学校教員としての任務と仕事内容について十分に理解できるようにする。
(2)第2コア授業「初等中等教科教育実践Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の内容について，教科専門と教科教育の教員のコラボレーションを進め，教育現場の教員との連携を深めながら，教育実習に十分対応できる教育実践能力を高めていく。また学修キャリアノートの充実を図り，教職実践演習へのスムーズな連結を図る。
学生生活支援については，学生一人ひとりの個性と能力を伸ばす観点から，これまでの指導体制を崩すことなく，さらに内容を検討し改善・充実させる。
(3)各学年の担任教員と学生との懇談会や，コースの全学生と教員との懇談会等で，学生生活や進路，また音楽について語り合える場を設ける。
(4)教員採用試験のために，これまでにもまして「各種実技指導，音楽理論，小論文指導，面接指導，模擬授業，授業案作成指導等」音楽コースの全教員協力のもと支援体制を充実させる。

2．点検・評価

教育支援について：(1)第1コア授業では，音楽と音楽科教育の意義について学生と語り合った。昨年度と同様に，教育実践という見地から，音楽科教育のエッセンスを特定し，音楽授業や音楽教師のイメージが芽生えるように指導内容を工夫した。(2)第2コア授業に関して，初等中等教科教育実践Ⅰでは，一冊の教科書と指導者の範唱，範読，指揮，語りかけや問いかけだけで，模擬授業を試みる演習を行い，音楽の学習指導の中核的な技をイメージすることができるように指導内容を工夫した。初等中等教科教育実践Ⅱでは，歌唱教材の教材研究の方法と伴奏の方法についての演習を行った。初等中等教科教育実践Ⅲでは，音楽科教育学担当の教員と作曲担当の教員がTTで授業を行い，双方の専門的な立場から中学校教材の楽曲の中にみられる音楽の特性と教材としての特性について講義し，これらを統合し応用する場として，模擬授業によるシミュレーションを試みた。また教育現場の教員との連携を深めながら，教育実習に十分対応できる教育実践能力を高めていくことができた。また学修キャリアノートの充実を図り，教職実践演習へのスムーズな連結を図った。
学生支援について：(3)学生生活や進路，また音楽について語り合える場として次のような場面を設けた。クラス担当教員として，コース教員がそれぞれの学年で学生と懇談会を行った。新入生，2年次生および3年次生合宿研修に参加し，履修相談・進路相談等を行った。前期の授業の後半期に個人面接とクラス懇談会を実施した。授業や日常の歓談時に加え，学内演奏会や卒業・修了演奏試験後の反省会や論文の中間発表会等の行事を通して，音楽について，教育において音楽がもちうる力について，進路や人生設計について，学生と教員が語り合うことができた。健康面や精神面で不安定な状況に陥った学生に対して，コースの教員全員で問題の解決に向けて対策を検討し，対処した。(4)教員採用試験のために，各教員がそれぞれの専門性から次のような指導を積極的に行った。教員採用試験の準備として，弾き歌いやピアノ初見演奏，ソルフェージュ，音楽理論，創作等の指導を行った。授業外で個々の学生の採用試験の課題にそって，小論文や模擬授業，場面指導等の指導を行った。聴音の課題に問題を抱える学生に対して，個別に指導を行なった。採用試験でリコーダーの試験がある学生に対して具体的な演奏法や初見演奏の指導を行った。

Ⅱ－2．研究

1．目標・計画

本コースでは，教員一人ひとりの専門分野における研究を尊重すると同時に，これらを基盤として，全教員が協力して音楽科の教員養成を具体的に展開するために必要な授業計画や指導法の研究を工夫してきた。このような体制を維持しながら，音楽科授業実践力の育成をめざした教員養成コア・カリキュラムを有効に生かすために，さらなるFD推進の可能性を検討する。
(1)各教員が余裕をもって研究に従事できるような環境及び協力体制をつくる。
(2)「学生たちの自己省察力の育成をめざした音楽科教員養成カリキュラムの研究」を構想し，科学研究費補助金の申請を行う。
(3)コア・カリキュラムに基づいた授業実践の具体的な検討や「教職実践演習」に向けての指導体制の検討を通して，PDCAサイクルを生かしたFDの可能性を検討する。

2．点検・評価

(1)他の教員の出張・研修時などに委員会に代理出席するなどして，互いの研究環境の維持に努めた。(2)今年度も，音楽コース内でのコア・カリキュラムを構想するために，「学生たちの自己省察力の育成をめざした音楽科教員養成カリキュラムの研究」を構想し，科学研究費補助金の申請を行った。(3)昨年度と同様に，コア科目の実践において，初年次教育に着目し，学修キャリアノートの活用を念頭に置きながら，授業内容を工夫した。特に，今年度は，学修キャリアノートの記述の仕方を指導した。コア・カリキュラムに関して，「教科内容学研究プロジェクト」に積極的に協力した。平成25年度に向けて，新たに全員体制で初等音楽Ⅰの授業を担当するように指導体制を変更した。

Ⅱ－3．大学運営

1．目標・計画

各教員がそれぞれの立場で，部会や各種委員会等における役割・任務を十分に果たせるよう，コース内の協力体制を整える。
(1)コース内の連絡等が迅速且つ十全に行えるよう，メール等の有効利用を促進する。
(2)コース内の役割分担を明確にし，無駄を省くようにする。
(3)コース内の電力等の省エネを促進する。

2．点検・評価

(1)コース内の連絡は基本的にメールを用いて行うようにし，教員が学外にいる場合でも迅速に連絡等が行えるようにした。その結果，緊急課題に対して迅速に対応することができた。(2)コース内での役割，たとえば演奏会関係，練習室関係，教育機材関係，書記・会計等を教員で分担し，効率よくコース内を運営した。(3)講義室や研究室の電灯を最小限の点灯に留めることを実行した。授業中，講義室や研究室における室温の管理を頻繁に行った。研究室の照明（蛍光灯）を常に半分消灯し，可能な限り，エレベーターの使用を避ける等の努力を行った。日頃より，芸術棟6階のピアノ練習室の使用状況を確認し，照明や空調の省エネに努めた。

Ⅱ－4．附属学校・社会との連携，国際交流等

1．目標・計画

本コースの専門性と人的資源をもって附属学校・社会との連携や国際交流を展開することによって，教育・文化面で広く社会に貢献すると同時に，そこから様々なニーズや視点を得ることによって，自らの教育・研究のあり方を客観的に捉え直す機会とする。
(1)附属小学校・附属中学校の研究発表会や教育実習指導，授業支援やLFタイム及び「教育実践フィールド研究」等を通して，附属学校との連携を深める。
(2)公開講座を，現職教員及び一般社会人等を対象に開講する。
(3)教育支援講師・アドバイザーをはじめ，徳島県生涯学習情報システム「まなひひろは」など，協力要請に応じて積極的に幼稚園，小学校，中学校，高等学校等に出向き，指導・助言等を行う。
(4)留学生を積極的に受け入れるとともに，コースとしての留学生への支援体制を充実させる。

2．点検・評価

(1)附属小学校と附属中学校の研究活動に参画し，研究大会当日は，助言を行った。また，教育実習生の研究授業にも参加し，助言を行った。附属中学校のLFタイムにおいて，「教育実践フィールド研究」と連携させた，大学院生による演奏会の企画，指導を行なった。(2)公開講座「楽しい歌唱教室」として，現職教員及び一般社会人を対象とした講座を開設し，定員を越す参加者があった。今年度も，免許更新講習と10年次経験者研修で音楽科教育に関する講座を開き，講師を担当した。(3)教育支援講師・アドバイザーとして，県内の学校に出向き，専門的な指導・助言を行った。徳島県の中学校音楽研究会において，現職の中学校教員に指揮法の講習を行った。(4)中国や韓国からの留学生への研究指導を行い，生活上の相談や指導を積極的に実施した。留学生との日常的な情報交換を行い，希望に応じて，歌唱教材の弾き歌いに関する特別レッスンを行なった。

Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）

平成24年度音楽コースの学部卒業生6名の内，現時点で，3名が教員として正規採用され，2名が非常勤講師として採用された。また，大学院1年次生2名が教員採用試験に合格し，平成25年4月，正規採用された。その内，1名は在職しながら大学院を修了することの可能性を残した県であったため，一旦休学し，来年度復学する。休学中もサポートしていく予定である。大学院の教育では，コア科目である「教育実践フィールド研究」において，音楽コースの特色を生かし生の音楽を附属中学の生徒に提供するという「アウトリーチ」を昨年に引き続き行ったが，今回も附属中学から大変喜ばれた。企画・構想の段階から他の学生の知識・経験を共有することができ，学生相互のコミュニケーションが深まった。この「アウトリーチ」の経験は、音楽コース主催の学内演奏会や音楽コースの大学院生主催により毎月開催される「音楽の芽」の企画運営にもさらなる活力を与え，本学における音楽的な環境の維持向上に貢献できたと考える。